章の文字にして偶像崇拜者のカアバに巡禮するを禁し、不信者に臨むには劍を以てし、基督教徒猶太教徒たりとも假借する所なしといふのである。かゝればアラビヤの各地より使節はメジイナに來り皆臣從の禮をとり、紀元六百三十一年六月にはナジラン(Najran)の種族はクヘリドの爲めに征服せられ、同年十二月にはエメンの不信者もアリイに征服せられて平定し、全半島はマホメットが掌握に歸して渠が一代の大業は全くこゝに終結を告げたのである

第八節　評論

吾人の觀察をして誤謬なからしめばマホメットは政治家としての手腕も亦尋常の材にあらず、渠はメジイナの二豪族なるアウス、クヘヅラジの宿怨を緩和し、彼等の競諍を利用して巧みに兩派の首長となり、アブドアラを繰縱して不平黨をして反逆の頭を擧けさらしめ、遂にメジイナを根據地としてアラビヤ全半島に覇權を確立したのである。這般の政策は渠がアルカスワに騎りて始めてメジイナに入り駱駝の留まる所を以て己れの住處としたる時より渠が胸中に定めたる成算であつた。而して渠が政策中最も成功したるはキブラの變更、ホデイビ

ヤの條約、メッカの占領にして、キブラの變更はアラビヤ土民の中心より希望したる所に合して、回教の位置を猶太基督兩教の上にあらしめ、オデイビヤの條約はメッカ人の勢力を失墜せしめ、メッカの占領は表面上衆寡敵せずしてコレイッシは降伏したるが如くなるも、事實は酋長アブ、ソフィアンと默契ありたる痕蹟を見るのである。假令彼等の間に何等の默契なしとするも先つ其酋長を改宗せしめて殆ど血を流さずして宿年の大敵をして己れに臣從せしめたるは洵に非凡の手腕といはねはならぬ。又渠が同盟軍に包圍せられたる時一酋長を利用して巧みに同盟軍を潰亂せしめたるが如き最も効績の顯著なるものである。渠が羅馬、ペルシヤ、エメン等の君主に使節を派して回教の信奉を勸告したるが如きは寧ろ渠が狂熱的宗教心より出たるものなるも渠が意氣と勢力をアラビヤ人に示すには最好の策である。惜い哉、渠は目的の爲めに手段を擇はず、强盜も可なり、暗殺も佳なり、戰鬪も可なり、アラビヤ的頭腦にて計畫し得べき所有姦計皆可なり、一種族を屠殺するも、一都會を焦土とするも其目的だに神と預言者との爲にせは皆天國の光榮を受くべきものとしたのである。されば渠は政治家として一個の偉材なりと雖も依然としてアラビヤ的政治家たるを免れぬの

である

マホメットが將軍としての技倆は渠が政治家としての手腕に讓らす、渠は自ら大刀を揮ふて敵と鬪ふの勇氣なしと雖も能く將卒を鼓舞し奮勵して水火の中にも突入せしむるの魔力を有し且つ天の時と地の利を應用して能く戰ふに至りては古への名將に愧ちす。渠がベドルの戰爭に際して僅かに三百の寡兵を以て之に三倍するメッカ人を潰敗せしめたるが如き、またオホドの戰爭に於て僅かに七百の少數を以て之に四倍强なる大敵に當りて一時勝利を得たるか如きは渠が驚くべき將才を發揮したるものといはねはならぬ、惜い哉、回教徒の不規律なる、未た全局の勝利を見さるに掠奪を事とし、敵將クハリドの爲めに大打擊を受けて敗北したるも、マホメットが將軍としての偉材はベドルの大勝に讓らさる賞讃を値ひするのである。其他大同盟軍がメジイナを攻圍せし時の如きは能く其守備を完うし、ホチインの戰爭にはハワアズィンの豪族を破りメッカの占領には四分隊の兵をして東西相應すること常山の蛇の如くならしめ、ムスタリク族を征せし時は急行の進軍を以て軍中の諍擾を銷滅せしめ、凡ての戰爭に於て善く敵の機先を制して迅雷の耳を掩ふに遑あらさるが如くなりしは洵に天成の將

軍といふべきである

かく渠はアラビヤ的政事家としては問然する所なく、アラビヤ的將軍としては世界の史上に異彩を放つに足り、回教王國の大祖としては雄偉なる人物であるに相違ない。されど渠が預言者として宗教家としての價値は大いに下落した。渠は崇高なる預言者の位置より墮落して鄙陋なる政治家となり、高尚なる宗教家の品位を失墜して殘忍なる軍人となつたのである。想ふに渠が前半生、即ち其幼時よりメッカ逃亡に至る迄は向上的生活して、後半生、即ちメジイナ移住より其卒去に至る迄は墮落的生活である。嗚呼、メッカに於ける謹嚴方正の君子はメジイナに移りて卑怯なる暗殺の教唆者となり、メッカに於ける『忠實の人』はメジイナに移りて强盜の巨魁となり、メッカに於ける隱忍默耐の宗教家はメジイナに移りて麤獷殺伐なる將軍と化し、メッカに於ける崇高にして敬愛すべき預言者はメジイナに移りて放縱にして淫蕩なる土蠻の本性を曝露したのである。吾人はかへす〳〵もマホメットがメジイナに移りて政事家となり軍人となりたるを惜み、其性行の墮落を哀しむのである

宗教擴張の方法に就ても渠は勸誘に代ふるに脅迫を以てし、聖書に代ふるに刀劍を以てし、福音に代ふるに干戈を以てし、寛容は變して虐待となり、謙遜は變して尊大となり、神聖は變して汚毒となつたのである。「汝等不信者を見出さば如何なる處にても彼等を殺せ」、これ大慈悲の神より使命を受けたる預言者の命令である。大慈悲とは果して斯の如きものか。吾人はマホメットが殺伐蠻獷なる蠻民の中に新宗教を開くに方りて劍を用ふるの必要ありたるを認めざるにあらず、吾人は渠が福音と生命と威嚴とは干戈によりて維持せられたるを知らさるにあらず、吾人は渠が戰鬪によらすんば必す能く是の如く成効せさりしを知らさるにあらす、されど吾人は劍によりて信仰を得せしめんとするは砂石を食はしめて飯に飽かしめんとするか如く、脅迫によりて異教を撲滅せんとするは噴火口を塞いて其煙を揚けしめざるか如くなるを知る。砂石は透底飯となるの期なく、噴火口の煙は早晩必す破裂すべし、さるをアラビヤの預言者は劍を以て正教を開きたりとなし、干戈によりて異教を勦滅し得たりとなす、距そ自ら欺き人を欺くの太甚しきや。面從は信仰にあらす、鸚鵡的祈禱は眞の宗教と何ぞ關係あらんや。想ふに今日教會に主長たる者も亦無意義なる信條を人に強

ひ、脅迫に加ふるに破門を以てし以て能く其宗教を維持し得たりとなすあり、吾人は彼等を以てマホメツトより一層の恐を演するものとなすのである

第四章　個人としてのマホメツト

第一節　マホメツトの妻妾

吾人は前章に於て公人としてのマホメツトを叙述したるか故に本章に於ては專ら私人としての渠が經歷を陳へ、所謂アラビヤの預言者が起居進退の小より進んで渠が帳中の秘密をも發き、以て裸々赤條々たるマホメツトの渾身を讀者の眼前に呈せんとするのである

マホメツトは己れの邸宅を設けずしてメジイナ殿堂の東壁なる妻妾の家に住し、殿堂を以て宗教上には祈禱處とし、政治上には內閣として用ひたのである。渠はメツカに於ては其第一の妻たるクハデイジヤの家に住して四女二男を擧け圓滿なる家庭を作りたればコレイツシ人の迫害は寒威嚴霜の如くなりしも渠が私宅の中にありては花笑み鳥歌ふの樂があつた。されは渠はクハデイジヤの生存中は一夫一婦の公道を踐みて毫も閨門の紊亂なかりしが、彼女の死後二三ヶ月

にしてアビシニヤに逃亡したる回教徒の寡婦サウダ(Sawda)を娶り、同時にアブ、ベクルの女アイシャ(Aysha)と許嫁したのである。サウダはクハデイジャの位置を補塡する爲めに娶りたるや論なきも、アイシャとの許嫁はアラビヤ的交際法に出たのである、何となればアラビヤ人は友情を厚からしむる爲め婦女を寄贈するは決して珍しきことに非ず、サド(Sad)の如きは其友人アブド、アル、ラマアン(Abd al Rahman)と親交を訂せん爲め己が妻女の一人を贈りたることあり、マホメットも亦女奴を朋友に與へたること曾に一再みにあらず。さればマホメットが五十歳の老翁にして僅かに六七歳の少女アイシャに許嫁したるは其父アブ、ベクルとの連鎖を緊密ならしむるの手段なりしや疑なし、然れどもアイシャは早熟の少女にして其後三年にして結婚式を擧げ、預言者が後宮の女王となりて威權を振ふに至つたのである

かくしてマホメットがメジイナに移住して、アブ、アユブ(Abu Ayub)の家に僑寓する間はサウダと同棲しつゝあり、其後殿堂も落成を告げ、妻妾の室も竣功するに及ひては、東南の極隅にアイシャの家を設け、次にサウダの家あり。マホメットは此處に彼等と居住を俱にしたのである。アイシャは預言者の妻妾中唯

一の處女にして且つ其天成の脆質と才操とに於て他妻に絶冠し、渠の精神を左右したるが故に回教史上に有名なる婦人となつた。次に渠はアイシャを娶りたると同一の動機によりてオマアル(Omar)の一女、ハプサ(Hafhsa)の手を得たるが、彼女も亦一回教徒の寡婦にして美貌を以てアイシャに亞き、勇氣ありて能く預言者に隨ふて軍陣の間を往來した。かく三妻を有したる老將軍は老いて益〻淫蕩となり、紀元六百二十六年一月從弟オベイダ(Obeida)の寡婦ゼイナブ(Zeinab)を納れて第四の妻とした、彼女は慈善心に富みて「貧民の母」として著名の婦人となつたのである。翌二月には更にアブ、サルマ(Abu Salma)の寡婦オム、サルマ(Omm Salma)を第五の夫人として之を迎へ、超えて六月には養子ゼイドの妻ゼイナブを第六の妻として後宮に班せしめたのである。當時マホメットは六十歳に近き老翁なるが一日其養子ゼイドを訪ひたるに適〻ゼイドは家に在らずして其妻ゼイナブ(Zeinab bint Jahsh)起て預言者を迎へ、衣裝を整ふるに遑あらずして雪の如き胸と玉を欺くべき膚もあらはにマホメットの眼中に入つたのである。渠は恍惚として其美に打れ『惠み深き主よ、嗚呼、汝は如何にして男子の心を動し給ふぞ』と覺えず獨語したるにゼイナブは之を聞いて誇り顏に之を其夫ゼイドに告け

た。忠實なるゼイドは直ちにマホメットを訪ふて其妻を離婚し預言者に捧けんと請ひたるも、渠は之を辭し『汝の妻は汝自ら之を畜へよ、而して神を恐れよ』といふた。然れども其妻とマホメットと意氣投合したるを看破したるゼイドは正式にゼイナブを離婚して預言者に奉呈したのである。是に於て一日渠はアイシャの傍らに坐したる時、俄かに卒倒して人事を忘れたるものゝ如く、良久して起き出て滿面に笑みを湛へていふ『誰か行きてゼイナブを祝するものぞ、神は彼女と予の結婚を許し給へり』と。乃ち下婢サルマは走りて吉報をゼイナブに傳へ、ゼイナブは雀躍に耐へずして其身に附けたる寶石を悉くサルマに與へたりといふ。此の如くマホメットはアラビヤ的道德の標準より見るも尙ほ不倫なるべき結婚をも敢てし、之を神意に托して其醜を掩はんとしたのである憐れ、神意も天啓も之に至りては半文錢の價値なく、淫蕩なる老爺が浮れたる戯語となつたのである。されど天啓といへば凛として犯すべからす、預言者の一言は汗の如くにして亦變すべからす、回教徒は之を以て正當の行ひとし、毫も疑念を挿むものなし、預言者の權威も亦偉なりといふべきである

上述の如く六人の妻を畜へて紅桃李白の美を一手に掌握したる老翁は日毎に渠

を訪問する多くの從者、賓客、使節等の面前に其妻妾を曝すの頗る危險なるを悟り、彼等をして覆面を著けしめ、且つ許可なくして信者の室に入るを禁し帷帳を隔つるにあらされば相語るを許さず、預言者の死後と雖も彼等の他人に嫁するを禁遏した。これ吾人がコラーンの第三十三章に見る所の文字である。此等六人の妻は各〻各別の家に住してマホメットは一日一夜宛一妻の家に止まりて絶えす巡回しつゝ平等に其妻を待遇し、回教信徒も亦渠の例に倣ふて衆妻に臨んたのである

同六百二十六年十二月ムスタリク族を征服して獲たる捕虜の中にジュウエリヤ(Juweiria)と名くる芳紀廿歳の美夫人あり、夙に同族なる酋長の一人に嫁したるが不幸にして虜となりメジイナの一信徒の手中に落ちたのである。然るに當該メジイナ人は彼女の門閥と美貌とを利用して多くの贖償金を得んと欲し、黄金九オンス以て其最低額と定めた、彼女は之を聞いて其過重なる贖償金の減少を請はんが爲めにマホメットに面謁を求めたるに渠は其艶姿嬌態に心を奪はれ老牛の如く涎を流しつゝ、『予は汝を贖ふて室とせん』といひ、彼女も亦喜ひて渠か第七の夫人となつたのである

ムスタリク族遠征の時に方りてアイシャも亦軍に從ひたりしか凱旋の前夜彼女は其天幕を出て小距離の處に到り頸飾を落したるを忘れて天幕に還り、再ひ同處に到つたのである。然る間に出發の時間は來りて彼女の轎夫等は彼女の在らざるを知らずして轎を駱駝の背上に乘せて去つた。さればアイシャの還り來るや、天幕もなく轎もなく駱駝もなく一物をも殘さざれば彼女は奈何ともすべからず、轎夫等は必す其過失を悟りて還り來るべしと想像して衣服を以て全身に綱ひ地に坐して困睡した。然るに曉に近き頃、サフウアン(Safwan)なるもの同しく偶然進軍に後れて此處に來りアイシャを見て大いに驚き其駱駝に騎らしめ急速に行進したるも遂に軍隊に追及する能はす、衆に後れてメジイナに歸つたのである。是に於て乎、アイシャとサフウアンとの間に怪しき關係あるべしとの流言をなすものあり、マホメットは之を聞いて不快の感を懷き、アイシャに對する態度は冷淡となり、アイシャも亦其操守を敗りたりとの誣言を耳にして憂苦悲痛の結果病に罹り、父の家に歸省した。此機に乘して不平家アブトアラ(Abd-allah ibn Obey)を始めとして、詩人ハッサン(Hassan)等大いにアイシャを攻擊し、ゼイナブの妹ハムナ(Hamna)の如きは其姉の爲めにアイシャが位置を失墜せんこ

とを希ふたのである。マホメットは事態の益〻不利なるを見て猥りに誣言をなす者を譴責し、且つアリイの忠告を容れてアイシャに就て事實の有無を質さんが爲めに彼女の兩親と共に其病室に入つた。マホメットはアイシャの傍に坐して『アイシャ汝は人々が汝に就て語る所を聞きたらん、汝若し實に罪あらば神に對して之を悔いよ、何となれば神は其僕の懺悔を受け給へはなり』といひたるに、彼女は涕泣しつゝ『妾は神に誓ふていはん、汝の謂ふか如く妾は神に對して悔いさるべし、妾は纖弱なる一女子なり、妾若し懺悔せは神は妾が罪なきを知り給はん、妾若し拒まば何人も妾を信するなし、妾はヨセフの父が謂ひたるか如く謂ふを得べきのみ。『忍耐は予に適す、主は予を助くる者なり』と。時にマホメットは失心卒倒の狀を裝ひて後、前額より汗を拭いつゝ叫ひていふ『アイシャ喜ふべし、神は洵に汝の罪なきを告げ給へり』と。乃ち人民を集めて天啓なるものを宣へた、即ちコラーンの第二十四章である。此神勅によりて姦婿せる者は百の笞刑に處し、四名の證人なくして既婚婦人の失操を公言する者は八十の笞刑に處するの法律は設けられ、詩人ハッサン、ハムナ等皆八十の笞刑を課せられ、預言者の妻にして罪ある時は二倍の罰あるべしとの忠告を與へて局を結んたの

である

以上法律の外、渠はコラーンの第二章に於ては飲酒の害を叙し、第五章に於ては絶對的に禁酒を命するの法を設け、結婚、離婚、男女の關係に就ての法律を制し、通常人にありては四人を以て正妻の最大數となし、女奴は無制限に妾とするを許す等、家庭に關する多くの法律を制定したのである

次に紀元六百二十八年八月マホメットはクハイバルの猶太人を征服し其酋長キナーナを殺して彼が新婚の夫人なる十七歳の少女サフィヤ(Safia)を奪ふて第八の夫人とし、同年秋、アビシニヤより還りたるオベイドアラの寡婦オム、ハビイバ(Omm Habiba)を納れて第九の婦人とし、六百廿九年二月今や第六十歳の高齢なる預言者は伯父アッバスの義妹メイムラ(Meimura)を娶りて第十の夫人となした。

これより先き渠は海外の諸國王に使節を遣はして回教を奉せんことを勸告したるにイジプトのムクオウカスは二人の女奴をマホメットに贈りたるは吾人は前章に叙へたる如くである。彼等は一をシリン(Shirin)他をメリイ(Mary)と名けて一雙の玉の如き美人であつた。彼等は姉妹なるが故に二人同時に妾とするは違法なるを以て渠はメリイを以て妾とし、オム、サリム(Omm Salim)を其下婢とし、

上メジイナの一花園の中に妾宅を設けて之に居らしめたのである。然るにマホメットの妻は一人も子なきに反してメリイは六百三十年四月に至りて一男子を擧け、イブラヒム(Ibrahim)と名つけたれば、渠が歡喜は譬ふるにものなく、イブラヒムが誕生の第七日にはクハデイジヤの時の例に倣ふて山羊を犧牲とし、其頭髪を剃り、貧民には銀貨を配與し、日毎に其保姆オム、バルダ(Omm Burda)を訪ふて小兒を抱き揚け其頰に接吻して愛育しつゝあつた。かゝればメリイは奴隷の位置より上りてイブラヒムの母となり、預言者の特別なる恩寵を蒙るが故に他の妻妾等は言はず語らす嫉妬心に驅られて異體同心メリイを惡みつゝあつた。然るにマホメットがハプサ(Hafhsa)の家に宿るべき日に當りて彼女は要務ありて其父を訪へく出て行きたるも如何にしたりけん不意に自宅に歸り來つた。何そ圖らん、彼女はメリイとマホメットとを其私室の中に發見したれば殆んど狂氣の如く怒り、譏り咀ふて預言者を批難し、之を全妻妾に告げんとした。マホメットは家底の醜を外に揚くるを怖れ、將來メリイに近かざるを約して彼女をして事を秘密にせしめんと試みた。然れともハプサの嫉妬は抑へんとして抑ふべからず、直ちにアイシャに之を語りたれば彼女も亦其熱情を沸湯せしめ、そ

れより瞋火は後宮に燃え移りて、彼等は皆マホメットを誹謗し同盟したるか如く一致して預言者を冷遇したのである。仍て渠は神勅なりと稱して妻妾の柔順ならさるを責め、若し彼等にして改めすんば離婚して他の貞淑なる新妻を迎んと公言し、全一ヶ月間、諸妻を捨て但にメリイと共に起居しつゝあつた。然れともアブ、ベクル、オマアル二人の仲裁により再ひ天啓なるものに托して渠は妻妾の家に還つた、これコラーンの第六十六章に記したる文字である。以上の如くにしてマホメットが老後の樂みとして比すべきものなきイブラヒムは不幸にして十五六ヶ月の後重患に罹り、メリイ、シリン、マホメット等の涙に其臥床を漂はされ計りにて終に死亡した。これ預言者が妻妾に關する出來事の一班である、

第二節　マホメットの家庭生活

マホメットの家庭生活は普通アラビヤ酋長のそれと大差なく極めて單純なるものにして、通常服は重もに白き綿布より成り、禮服は赤色又は縞の麻布を用ひ、曾て黑色の羅紗服を著けたるも其惡臭を嫌ふて之を捨て、また曾て絹衣を著け

て、祈禱したるも『斯の如き物は敬虔なる人の著くべきものにあらず』として之を廢したりといふ。渠の頭巾は幾重にも其頭を覆ひ、其端を兩肩の中間に垂るゝを常とした。渠は其上衣たる襯衣たる頭巾たると帶たるとを論せず新たに之を調製したる時は必す神に感謝し祈禱して後之を著け、殿堂内にて祈禱するには造革を敷きて坐し、又は椰子の纖維より造れる墊をも敷きて祈禱した。また渠が外國の使節を引見する時に著けたる長衣は後代の回王教に傳へられ祭式の盛典に用ひられといふ

渠は銀製の指環を有し之に『神の預言者マホメット』と刻し預言者の印として用ひ、また黃金の指環をも用ひたるが信徒の之に倣ふを見て廢止したりと傳へらる、併し這は少しく信を置き難き傳說である。渠の靴は二本の紐あるハドラマウト(Hadhramaut)形のものにして屢〻補修して之を用ひ、祈禱中も靴を脫せざるを常とした

渠は清潔を好み、屢〻其身體を洗ひ其髮毛を梳り、香油をつけ、其鬚髯を洗ひ、其手を洗ふには椰子の煎汁を以てし、眼にはアンチモニイをつけ、芳香を以て其身を淨むるを好んだのである

渠が住したる妻妾の家は燒かさる瓦にて建られ各室の境界は椰樹の枝と泥土とにて造りたる壁にて區劃せられ、入口には黑色の毛布を張りて戸とし、內部には革製の水囊を壁に懸け、臥床には椰子の纖維の疊を敷けりといふ。されば或時渠は其手に負傷して椰子の纖維にて編みたる臥床に横はり革の枕をなしたるにオマアルは預言者の身體に繩床の痕あるを見て涕泣し『ペルシャの王及羅馬の皇帝は黃金の玉座にの坐し、錦繡の衣を服するに汝の狀態は斯の如きか』とて歎息した。或時マホメットが臥床より起き出たるに其身體に繩痕あるを見て從僕アブドアラは床上に柔かなる物を敷んと乞ふた、時に渠は『しかなすべからず、塵世の快樂、予に於て何かあらん、塵世と予との間に如何なる關係ありや、塵世は洵に予にとりて一樹に過きす、旅人は其蔭に休みたる後、之を通過し去るにあらすや』といふたと傳へてある。以て渠が質素なる生活を想見することができるであらう

マホメットは自ら其手を下して一切の事を處理するの習慣ありて自ら其衣を繕ひ、其靴を補ひ、其山羊を繫き、家事に於ては其妻を佐け、貧民に物品を施すにも自ら取りて之を與へたのである

渠は糖果、蜂蜜等の甘味を好み、大麥の麵麭を食ひ乳を飲み、殊に南瓜を嗜み、胡瓜、棗椰をも好み、山羊、少羊等の肉は其肩を揀んて食用し、肉と共に調理せられたる麵麭、乳酪を以て加味せられたる波斯棗は渠が最も美味としたる所であつた。一日渠は波斯棗を食ひて其麁惡なるものを殘して其手に携へたるに、他人の之を乞ふものあり、されど『予の好まさる所は他人にも亦之を與ふるを好ます』といひて與へさりしといふ。次に渠は葱を嫌ひ、蒜を食はずしていふ『天使は之を好まざるが故なり』と。渠は巴旦杏より製せる粉を食はす、遊冶郎の食として之を斥け、大なる蜥蜴はイスラエル人の化生なりとして其肉を食はず、されど此等の食物は他人の需用するを禁せさりしといふ。渠は食物をとるには指を以し、食し了りて其指を舐めて後之を拭ふを常とし、楊子を使ふこと屢々にして其齦を害するも厭はす、洗淨の前には必す楊子を使ひ、旅行中と雖も之を携帶するを忘れさりしといふ

アイシャの語れる所によればマホメットは婦人、芳香、及ひ食物の三を最も好めりといふ、渠が女色を貪りたるは吾人が前節に詳述したるが如く、また芳香に就ては麝香、龍涎香等を好み、樟腦を燒いて其香を嗅き、渠が往復する處は

芬馥たる香氣を空中に流すを常としたといふ

殿堂に於て公衆と共にする祈禱會にはマホメットの立つべき所に波斯棗樹の枝を樹て、渠は之に携りて立つのみにして一も禮拜壇の設けなかりしが、老年に及ひて長時間の起立に苦痛を感するに至りたれば信徒と計りて樫柳を以て高く拜壇を作り、三個の階段によりて之に昇るに便にした。而して金曜の祈禱會には渠は先つ此拜壇に昇りてカアバの方向に面して「大なる哉、神」と叫ひ、一般の信徒は渠の後方に立ち同しくカアバに面して同一の叫ひを發するのである。それより渠は稽首叩頭して神を祈り、壇を下りて再ひカアバの方向に拜伏する。此の如くすること二回にして祈禱を畢るのである。公私の祈禱中渠は決して欠伸せす、また噴嚏することあるも其面を掩ふて靜かに之をなし、葬儀の際は決して乘馬を用ひす、沈默して獨語しつゝあるが如く見えたれは迷信深き信徒は預言者が死者と語りつゝあると想像したといふ

渠は一日を三部に分ち一部は宗教に盡し、一部は家事に用ひ、一部は一身の爲めに費した。されど後年に至りては公務頻繁にして他人の爲めに時間を費やすことが多くあつた。渠は他人と談話するに方りては全身を以て人に向ひ、右の

拇指を以て左の掌を打ちつゝ談話し、音調は清朗にして靜かに力强く發音し、怒る時は其面を背け、喜ふ時は下方を見、屢〻微笑を漏せども、哄笑抱腹することと少く、何人をも接見して平等に人を待遇したのである。されど渠は常に威信と莊嚴とを失はすして渠に近くには必す尊敬の態度を以てせしめ、渠に語るには必す低聲にして慇懃ならしめ、渠の謂ふ所は一言一語絶對的にして其命令は法律となり、外臣の謁見には最も悃切にして尊敬を盡したのである

渠はメジイナ移住の後暫時の間貧困の生活を送りたるにや、三日間に一片の麵包のみにて饑を忍ひたることありといひ、また數月間火食せすして、棗實と水のみにて生活し、或は一日に二種の食を得る能はすして、麵包を得れは肉を得す、肉を得れば棗實を得ざることありたりと傳へてあり。且つ夜間燈火を點するの油なくして、アブ、ベクルより山羊の肉を贈られたる時アイシャとマホメットは暗中に之を食ひたることありといふ

然れともマホメットの貧困は暫時の間にして渠は掠奪物、戰利品の五分の一を自ら收めたれは物資に缺乏せさるのみにあらす、乘馬、乘用の駱駝、二十頭の乳駱駝、七頭の乳羊、男女の僕婢、七ケ處の花園、ナデイル族より沒收したる

田園、クハイバルにて沒收したる原野等を私有したのである。されど教稅(十分一稅)として納められたるものは毫も私消することなく、其家族と雖も之を費すを許さず、道路に落ちたる棗實さへ其教稅の一部ならんことを恐れて之を拾はす、されば ハサン(Hasan)なる小童が其祖父の傍に遊べる時、棗實一籠を贈られたるに其教稅なるを知りて渠は直ちに之を貧民に與へしめ、ハサンが棗實一個をとりて戲れつゝ之を口に入れたるに、渠は之を童兒の口より强ひて引き出して貧民に與へたりといふ

第三節　マホメットの性質

マホメットは頗る神經質の人物にして暗黑を恐れ、陰鬱なる雲を見ては顏色を變し、暴風驟雨にも心を勞して超自然なる勢力の其中にあるを感した。かく渠は神經質なるか故に喜怒哀樂も亦常軌を逸することありて哀しむ時は聲を放て泣き、怒る時は人を咀ひ喜ふ時は度外に人を愛したのである。之に反して其敵に對しては冷酷峻勵にして忍ふべからざるを忍ひて敢て殘忍の處分を施し、猶太の二殖民地の如きは其根抵より一掃して之を放逐し、コレイッァの男子七百

人を己れの面前に屠らしめ、婦女小兒を奴隸とし、クハイバルの酋長を拷問するには火を以てし更に之を殺して其妻と財寶とを奪ひ、渠の娘ゼイナブを虐待したるメッカ人を燔殺せよと命し、百歲の老詩人を暗殺し、女詩人を虐殺し、渠の從者は女酋長の四肢を駱駝四頭に縛して掴裂して之を殺したるも渠は之を咎めす、其オクバ(Ocba)を殺すに當りてや、オクバは其胡鄕なる少女の身の上を憂ひて『吾若し死せは誰か我憐れなる小女を養はん』とて泣きたるに渠は『地獄の火』あるのみと叫ひて之を殺したるが如きは最も冷酷の太甚しきものである。之に反して渠は其朋友に對しては最も懇篤忠實を極めアブ、ベクルを愛すること兄弟の如く、アリイを愛すること實子の如く、ゼイドなる奴隸を愛して彼をして其兩親を捨て渠に從はしめオトマンがメッカに使するや彼にして殺されたらんには渠も亦生命を犧牲にして之を復讎すべしとて有名なる『樹下の盟約』をなし、ミユタの戰に於てゼイド、ヂャファル等の戰歿するや、凶報を得たる渠はヂャファルの家に至りて其小兒をを抱いて涕泣し、從者をして衣食を贈らしめ、ゼイのの家に至りては其少女を抱きて號泣したる時、人あり何故に預言者は是の如く哀むやと咎めたるに『此悲哀は神の禁し給ふ所にあらす、朋友が朋友を哭す

る痛切の情なり』といひ、オトマンの妻にして渠の娘なるロッケヤの死するや、更に其女オム、コルタムを以て彼に與へ、オム、コルタムも亦死するや、『第三の女子あらば更にオトマンに與へんものを』といひ、ハワアズィン族を征服して其掠奪物を分配したる時メッカ人に多くを與へメジイナ人に何物をも與へざりしとて不平の聲勃發するや、『汝等は自ら神の預言者を携へ歸り、他人は家畜の群を携へ歸るを見て滿足する能はざるや、予は決して汝等を見捨てざるべし、若し全人類は一方に行きメジイナ人は他方に行くとせば予は洵にメジイナ人と共に行かん、主よ彼等を惠み給へ、彼等の子孫、其子孫の子孫をも永久に惠み給へ』といひたればメジイナ人は皆涕泣嗚咽して彼等の長き髯より涙の滴るを覺えざりしか如き、渠が友誼は終生渝るとなき最も忠實のものであつた。さすれば渠は敵に對しては睚眦の恨みも必す報ひ、朋友に對しては一飯の德も必す報ゆるの方針をとつたのである

上述の如く渠は神經質にして感情に激し易かりしも渠が強力なる意志は能く其激情を防き、渠が周到なる戒慎は能く其狂暴を制して渠をして忍耐と温厚の德を得せしめた、是れ渠が他の麤獷なるアラビヤ人と異る所である。渠は其信徒

に對しては如何に凡庸なる人物と雖も恂切と尊敬を以て之を遇し、温厚、親切、克己、忍耐、寛大は渠が全生涯を透して行ひたる美德にして之によりて信者の愛敬を其一身に集注せしめたのである。アイシャの謂ふが如くんば渠は他人の請ひを拒むを嫌ひて「否」といはすして沈默を以て之に代へ、處女の如く遠慮勝にして、不快なるとあるも其言語に現すよりは寧ろ之を擧動に示し、渠を招く者ある時は如何なる卑賤の人にも其厚意に應答し、渠に贈物をなすあれは何物にても喜んで之を受け、喜へる人に遇ふ時は其手を握りて共に喜ひ、哀しめる人に逢ふ時は同情の涙を注きて共に悲しみ、殊に小兒に對しては一層の親恤を垂れ、如何なる缺乏の時と雖も其食物を貧民に配與するを樂みとした。されば仁惠寛大は渠の性質中最も著しき特徴である。渠の寛大なるは但に其朋友に對するのみにあらすして敵と雖も渠に服從したるものは好遇を與ふるを常とし、メッカ人の如きは宿年の勁敵なりしも鐵血を用ひすして之を改宗せしめ、殊に其中の巨魁なる酋長をさへ尊敬と友情を以て之を待遇し積年の迫害、凌辱、恨恨を悉く忘れたるが如きは渠が器度の宏大なるを示すものである

また渠がメッカ征服後の處置といひ、メジイナの不平黨に對する態度といひ、

メッカ逃亡の方法といひ、渠が戰爭に用ひたる智畧といひ、渠に臣從を提言せる土族の處置といひ、著しく聰明なることを現はした、之と同時に渠は敵に對しては權謀術數を用ひた、即ち、渠の從者が聖月に隊商を欺きて血を流したる掠奪を是認して之を稱讃したるが如き、メッカの少年を奬勵して强盜をなさしめ以てメッカ人を苦しめたるが如き、ナディル族が己れを殺さんと謀りたりと詐稱して之を放逐したるが如き、一酋長を買收して同盟軍を解散せしめたるが如き、信徒を指嗾して政治上宗敎上の敵を暗殺したるが如き、皆姦計詐術の太甚しきものにして『戰爭は畢竟詐僞の遊戯のみ』との一言は渠が心腹を描き出して餘蘊がないのである

マホメットの性質中最も著しき點は渠が意志の極めて鞏固なるにあり、渠は何事に當りても必ず之を遂行せざれば止まず、宜なる哉、渠は上天の使命と信じたる回敎を創立して全半島の人民を風化し、回敎王國の大祖として偉勳を萬世に垂れたるや

第四節　マホメットの病死

マホメットは回敎を以てアラビヤ人の信すべき唯一の宗敎とし、全半島中渠に臣從せざるものなく、一切の偶像は聖地より一掃し、一切の異敎者はカアバの巡禮をなすを許さず、アブラハムの正敎は全く恢復せられて渠が上天の使命は遺憾なく果され畢りたれば今や、渠が天國に復歸すべき時は來つたのである。渠は紀元六百三十二年三月四萬餘の信徒を率ゐてメッカに參拜し、最後の巡禮をなさんとして出發した。此時渠は百頭の駱駝を犧牲とすべき準備をなし、アルカスワに騎りて渠が妻妾を悉く伴ふて聖地に來り、駱駝に乘りたる儘にて七回の廻禮をなして天幕に退いた。其後渠は豫定の如く大小の巡禮を終りて犧牲を殺し、其頭髮を剃り其爪を斫り、巡禮服を脱して通常服に改め、香を燒き、肉を配與して儀式を完うした。それより、ミナ (Mina) に於て無數の信徒に向つて『汝等、予が言を聞け、本年以後、予は再ひ汝等と共に此地に來ることなきやも知るべからず』と告げ、更に生命と財産と家庭の義務との神聖なるを演說し、また『汝等が食ふ所の食物を以て汝等の奴隷を養ひ、汝等の著る所の衣服を以て彼等に著せしめよ』と命し、『予は洵に予の使命を果せり』といひ、更に天を仰いて『主よ、予は予が使命を全うし、予が職責を果せり』と叫ひて集會を解散せしめた

のである

次に渠は再ひメッカに歸りてカアバを七周し、ゼム〳〵の神泉にて水を飲み、其口を洗ひ、靴を脱してカアバ入りて祈禱をなしてメジイナに歸つた。これ渠がなしたる最後のカアバ參拜にして「告別の、巡拜」として知られてあるのである。

「告別の巡拜」より歸りて後同年五月二十六日に至り、マホメットは劇しき頭痛を病み發熱したるも暫時にして痊ゑ、それより再ひ發病して大患に陷りたるが渠は之れを以てクハイバルの猶太婦人が渠に食はしめたる毒の再發したるものとし、背部の血管が破裂するが如く苦痛を感するといふた。思ふに渠の身心は痛く老憊したのである。メッカに於ける渠が苦心、焦慮、迫害、絶交、逃亡は渠が頑健なる體軀を磨礱するに足り、メジイナに於ける不斷の遠征、戰亂、諍鬪、及ひ回教王國の一切の公務は渠の健康なる頭腦を消耗するに餘りある、況や渠が癲癇的卒倒によりて苦痛なる靈感を受くるをや。されと渠は病患に屈せずして常の如く其妻妾の家を巡りつゝありたるも自ら最後の近つきたるを覺悟したるにや、或夜一人の僕を伴ふて市外の墓地に至り死者の爲めに神の恩寵を祈り「汝等は幸なる哉、汝等の運命は生き殘りたる人々よりも優れり」といふて歸つた

といふ。翌朝渠はメイムラ(Meimura)の家に入りたるも益〻重症に陷りたれば其妻妾を悉く召集し「予は重患を得て臥床にあり、予は順次に汝等を訪ふ能はず、汝等にして異議なくんば予はアイシャの家に留らん」といひ、彼等の同意を得たる後、手巾を以て頭を縛し緩く衣帶をつけてアリイ等に助けられてアイシャの室に入つた。アイシャは當時未た廿歳に達せざる少婦人なりしも善く老夫を看護し貞淑の美德を顯はした。それより七八日間渠は尙ほ殿堂に入りて衆に先ち祈禱し、多くの忠言を與へたる後、彼等に向つて「神は洵に其僕の一人に命じて、人生と神に近きものとの何れかを揀はしめ給へり、而して僕は神に近きものを揀ひたり」といひたるに何人も其意を解せずして衆皆茫然たりしが、アブ、ベクルはこれ渠が逝去の預言なりと悟りて涕泣した。時に渠はアブ、ベクルの泣くを制し、且つ「汝等の中、洵に予に對して親愛、敬信を盡したるものはアブ、ベクルに如くはなし、予をして腹心の友を揀はしめは彼を揀ひたるべし、されど回教は我等の凡てをして親しき兄弟ならしめたり」と人民に告け凡ての諠噪を禁して靜謐ならしめ、再ひアイシャの家に入るに臨みて顧みてメジイナ人に向つて「汝等は洵に予に親しき者なり、何となれは予は汝等の中に隱家を見出した

ればなり」、といひて感謝の意を表し、それよりアイシャの室に入つた。斯く病を犯して演説をなし身心を勞したれば病勢は一層重くなりて翌日の祈禱會には最早起つ能はず、乃ちアブ、ベクルに命して祈禱會の導師たらしめ、六月六日の土曜の夜に至り、發熱劇甚にして燃るが如く苦悶、惱痛、臥床の上に展轉して嘸唸の聲四壁に徹し、オム、サルマの如きは此恐るべき發作に驚いて覺えず高聲に叫ぶに至つた。渠は此の病痛を以て己れの罪を滅すものと公言し、信仰の强きものは苦病も亦多しといひ、翌日曜には兩腋下に苦痛を訴へ人事不省に横臥した。依てオム、サルマの助言によりて、アビシニヤの處方により藥材を渠の口に含ましめたるに藥液の力にて蘇生し、口中に不快の味を感したれば、「汝等は予に何をか爲せる、汝等は予に藥劑を與へたるにあらすや」と詰り、彼等は事實を自白して藥劑の成分を告けたるに渠は怒りて『去れ、汝は彼女がアビシニヤにて學びたる肋膜炎衝の藥劑なり、神は予をして此の如き惡病に罹らしむることなし、汝等此室中にある者は伯父アッバスを除いて皆予に呑ましめたる藥を呑むべし』と。是に於て婦人等は皆起ちて垂死の預言者の面前にて藥を服したりといふ

マホメットが病床に侍したる妻の中オム、サルマとオム、ハビイバはアビシニヤに逃亡したる婦人にして彼等が談話の序にアビシニヤに建築されたるマリヤの禮拜堂の莊觀、及其壁畫の優美なるを語りたるにマホメットは之を耳にして不快に感し、病熱にて精神錯亂せる間に叫ひていふ、『主、猶太人と基督教徒とを滅ほし給へ、預言者の墳墓を變して禮拜場となす所の人々に對して神の怒りを蒙らしめ給へ、主、予が墳墓を變して崇拜の目的物たらしめ給ふ莫れ、全アラビヤを透して回教の外他の宗教あらしめ給ふ勿れ』と。またアイシャに問ふ「汝をして保管せしめたる黄金は何處にありや」と。依て彼女は黄金の所在を告けたるに直ちに持ち來るべしと命し、金貨六個を其手に握りて之を算へ以て貧民に施さしめた

日曜の夜は通宵病患太甚しくして夢幻の間に祈禱しつゝありたるも翌八日の月曜には熱度少しく減退して意氣を恢復した、然るに前夜病ひ危篤なりと聞きたる信徒は晨朝より殿堂に充滿して祈禱を爲し、アブ、ベクルはマホメットに代りて導師として第一回の叨頭を終りたる時アイシャの家の戸帳は靜かに開けて、マホメットはアッバスの子に扶けられつゝ殿堂に入り、群衆の熱心に禮拜する

を見て溢るゝばかりに微笑を漏して之を喜ひ、徐ろにアブ、ベクルに近つきたるにアブ、ベクルは後方より預言者の來りたるを悟りて席を讓らんとした。然れとも渠はアブ、ベクルの手をとりて進ましめ、二人相竝ひて拜壇に立ちて祈禱式を終つた。其後アブ、ベクルは渠と談話し、其快方に向ひたるを祝し、渠の許可を得て上メジイナなる妻の許に赴いた。マホメットは暫時衆民と談話を交換して後再ひアイシャの室に入りたるが此日の小快は燈火の明滅に過きすして渠は室に入るや否や褥上に倒れ、アイシャは病勢頓に革りたるを見て渠の頭を以て其胸にあて、渠は愈、最後の近つきたるを知りて一椀の水を持ち來らしめ其顏を濕して『主、願くは死苦に臨める予を扶けんことを乞ふ』と三たひ祈り、『グブリエル、予に近つき來れ』といひ、祈禱の中に瞑目して溘逝したのである

マホメットの訃音は口より口に傳はり家より家に飛ひて忽ちメジイナ全市に擴り、オマアルは渠が絶息の報を聞くや否や來りてアイシャの家に入り、屍布を除きて渠の容貌を凝視した。時にマホメットの死相未た顯はれす、顏色生けるか如くなればオマアルは渠の死を信する能はすして起ちていふ『預言者は死せす、渠は但に人事不省なるのみ』と。乃ち殿堂に入て衆に告く『神の使徒は死せす、汝

等の惑へる精神はかゝる想像を懷けるのみ、主の預言者は僞善者と不信者とを滅ほして後にあらされは死せざるべし』と。時に預言者の訃を聞いて集り來る者は時々刻々增加しつゝあり、オマアルは彼等の中に立ていふ『僞善者は汝等に說いていはん、預言者は死せりと、否、渠は但に神の許に往けるのみ、恰もイムラン(Imran)の子モセスが四十日間不在にして其信徒は彼を以て死せりと爲したる後歸りたるか如し、故に予は誓ていふ、洵に預言者は歸らんと、若し渠は死せりといふ者あらは予は必す彼等の手足を斫らん』と。殿堂に塡塞せる人民はオマアルの熱心なる能辯に動かされ預言者の死に對して半信半疑、希望と失望の中間に彷徨したのである

時にアブ、ベクルは歸り來つた、彼は殿堂にてオマアルの激語を放つを聞きたるも直ちにアイシャの家に入り、屍衣を除きて死せる預言者の顏に接吻し、兩手にて少しく其頭を揚けて渠が容貌を熟視し、叫ひていふ『然り、汝は死せり、嗟于、予が友、予が精選せる友、父母よりも懷かしき友、汝は最後の苦を嘗めたり』と。かくて再ひマホメットの頭を枕上に置き、再ひ其顏に接吻して屍衣を掛けて後徐ろに退いた。それより彼はオマアルが熱心に論しつゝある所に至り、

「沈默せよ、オマアル、坐せよ」といひたるもオマアルは尙ほ之に耳を欹けず嫌んに激語を放ちつゝあつた。依てアブ、ベクルは彼を見捨て自ら人民に向て演說した、『全能の神は下の神勅を預言者に示しゝにあらすや、「尙に汝は死せん而して彼等も死せん」。またオホドの戰爭の後の神勅に、「マホメットは一使徒たるに過きす、他の使徒は洵に渠の前に死せり、若し渠にして死し或は殺されたらんには汝等は如何にすべき、汝等は背き去るべきや」。マホメットを崇拜する人あらは彼をしてマホメットは死せるを知らしめよ、神を崇拜する人あらは彼をして主は常に生きて死せさるを知しめよ』と。アブ、ベクルの沈着にして莊重なる語は激昂せる人民の頭腦に冷水を灑くか如く感せしめ、「尙に汝は死せん、而して彼等も死せん」てふ神勅は葬儀を告くる鐘の如くに信者の胸に響いた、彼等はコラーンに此等の語あるを忘れつゝあつた。今や恐るべき眞理は掩ふべからず預言者は死せり、神の使徒は逝けり、また奈何ともすべからす、彼等は唯聲を放つて號泣するのみであつた。オマアルは夢の覺めたる如く「アブ、ベクルが神語を誦せし時、予は覺えす戰慄した、予が四肢はわなゝきて予は地に倒れ、始めて預言者の死せるを信した」と自白したのである

それより預言者を葬るべき墓地に就て種々の議論を生せしがアブ、ベクルは「預言者は其死する處に葬らるべし」とマホメットより直接に聞きたりとてアイシャの家の中を墳墓と定めてメジイナ人の工夫をして準備に著手せしめた。然る間にマホメットの屍は月曜の午後より火曜の午後まで二十四時間棺車に安置し、火曜には市民の拜瞻を許し彼等は三三伍伍、隊をなして預言者に最後の訪問をなし、其容顏を見、其遺骸に接して神を祈つたのである。而してアブ、ベクルとオマアルとが拜瞻したる時は室內は人民を以て充たされ、彼等は「神の預言者、汝の上に平和あれ、神の慈悲あれ、神の惠みあれ、吾等は預言者か使命を全うし、神の道の爲めに戰ひ、遂に神は渠の宗教に勝利を得せしめ、渠の謂ふ所を實行し、神は唯一にして崇拜せらるべき者なるを示し、吾等を親愛し、信徒に對して悃篤親切を盡し、正信を吾等に與ふと雖も何等の報償を求めず、況や何れの時か之を賣りたることあらんや」といひたるに人民は皆一齊にアーメンと唱へたといふ。男子の拜瞻終れは次に女子は之に代りて拜瞻し、女子に續いて小兒奴隸の拜瞻あり。火曜の夜に入りて最後の祈禱は遺骸の爲めに行はれ、渠が著用したる赤色の上衣を墓穴の中に敷き、渠の遺骸は之を洗いたる近親の人に

よりて墓中に下され、燒かざる瓦にて造れる穴の中に埋葬せられたのである、斯くして渠は最愛の妻の一室の中に永久に眠りつゝあるのである

第五節　總評

マホメットは畢竟マホメットなり、神使にあらず、預言者にあらず、アラビヤ人なり。然れども回教徒の眼には渠は超人と映したらん。吾人の批評眼には渠が動物的弱點は歴々として指摘すへし、されど渠は尙ほ能く大聖たるを妨けす。何となれは人は決して動物的弱點を脫し得べきものにあらす、動物的弱點を有しつゝ尙ほ能く動物に超絕し、凡俗に絕冠し、古今に其類を得る罕なる者を聖哲といふのである。佛教徒の眼より見たる釋迦は圓滿の人格ならん、基督教徒の眼中に映したるエスは神の子ならん、吾人の批評眼に入りたる釋迦とエスとは動物的弱點の歴々として指摘すべきものあり、然も尙ほ能く命世の大哲たるに於て妨けなし。凡そ夫れ歴史的人物の評價は其時代と其國土と其人民を標準として定めさるべからす。今日の學童を以て古へのソクラテースに比す、後者は卻て前者より無智なるやの觀あるべく、ナザレのエスを以て現代の學者に比す、前者は卻て後者よりも文盲なるや知るべし。されど這は比較の正鵠を得たるものにあらす。故に今日歐洲の道德と宗教とを以て古へアラビヤの其等に比す、其劣等なるや固より論なし、然れどもマホメットの眞價は此比較によりて軒輊せらるべきものにあらず。渠が眞價は同時代のアラビヤ人に比較して高下優劣を定めさるべからず。果して然れば佛陀が其時代に傑出して能く時弊を救ひ、智的解脫の法門を開き、エスが其時潮に反抗して天の王國を地上に建設せんとしたるが如くマホメットは渠が時代の宗弊を看破して頑愚なる偶像崇拜を打破し、一神の正教を恢復したのである。是を以て佛陀を以て印度の大聖とせばマホメットを以てアラビヤの大聖となさざるべからず、エスを以て猶太の預言者とせはマホメットを以てコレイッシの預言者となさざるべからず。吾人は此等宗教の教祖が凡俗と同一の弱點を有しつゝ能く凡俗の企及し能はざる德操を完うして古今に獨歩するを見て欽慕の情に耐へぬのである。蓋し凡聖の差は單に一歩なるのみ。其力を用ふるの公私如何にありて存す。孔聖必すしも吾人より大なる頭腦を有したるにあらす、然も其仰けば愈〻高く、鑽れは愈〻堅き彼が品操は吾人のそれに比して白雲萬里を隔つ。佛陀必すしも吾人より多くの

智識を具へたるにあらず、然も其人天の師表たるに至りては吾人をして天に梯して昇る能はざるの思ひあらしむるのである。吾人はマホメットを論じて渠が面貌を讀者に介し、渠が幼時の薄命を叙し、渠が壯年の生活を述べ、渠が宗教家としての行動を記し、渠が將軍としての手腕を論じ、渠が政治家としての伎倆を陳べ、渠が妻妾に對する關係を說き、渠が性質を評し、渠が弱點を擧げ、渠が病死を記して渠が全生涯の兩面を叩いて讀者の賢明なる判斷に訴へたのである。これ他なし、人は畢竟人なるのみ、人は畢竟人なりと雖も尙ほ能く超人的高風を維持し、上天の光明を凡身に體現するの可能なるを示さんとするに外ならず、カアライルはマホメットを論じて

然らば則ち此マホメットや、余輩は決して之を目して虛妄的俳優的の人物と爲し、微賤自識貪名の野心策士と倣さざるべし、否余輩は此の如く考ふ能はざるを奈何せんや。其告白せる使命は粗笨なると共に眞實なり、不測の深淵より發し來る熱誠亂雜の聲たるなり、其言語は虛僞に非す、其事業も虛僞に非す、豈胡ぞ虛妄驅瞞の者ならんや、烱々たる一團の生命、其生命の塊として自然の大なる胸裏より吐き出されし者は彼なり、故に曰く汝須く世界を燃せと、世界の造物主、命する所實に此の如し、過失あり、缺點あり、不誠實の行爲ありて、彼之を犯しゝこと已に充分に證明すべしとするも、亦以てマホメットの此根本的大事實を動かすに足らざるなり

然り洵にカアライルが言へるが如し吾人復何をか加へん、讀者以て如何となす

（終）

マホメット年譜

西暦紀元五百七十年。アビシニヤのアブラハ王、メッカを討つ。八月廿日マホメット生る。秋、サド族なるハリイマの許に哺育せらる

同五百七十一年。第二歳。砂漠なるハリイマの許にあり。

同五百七十二年。第三歳。同上

同五百七十三年。第四歳。同上。癲癇の如き奇病發す

同五百七十四年。第五歳。メッカなる實母アミナの許に歸る

同五百七十五年。第六歳。母と共にメジイナの親戚を訪ふ。實母アミナ死す

同五百七十六年。第七歳。祖父アブド、アル、ムッタリブの家に寄食す

同五百七十七年。第八歳。同上

同五百七十八年。第九歳。祖父歿す。伯父アブ、タリブの家に寄食す

同五百七十九年。第十歳。同上

同五百八十年。第十一歳。同上

同五百八十一年。第十二歳。同上

同五百八十二年。第十三歳。隊商に從ふてシリヤに趣く、始めて猶太教、基督教に接觸す

同五百八十三年。第十四歳。

同五百八十四年。第十五歳。

同五百八十五年。第十六歳。伯父ゾベイルに隨てユメンに通商す

同五百八十六年。第十七歳。

同五百八十七年。第十八歳。

同五百八十八年。第十九歳。

同五百八十九年。第二十歳。コレイッシ全族と共にハワアズィン族を討つ

同五百九十年。第二十一歳。

同五百九十一年。第二十二歳。

同五百九十二年。第二十三歳。

同五百九十三年。第二十四歳。

同五百九十四年。第二十五歳。寡婦クハデイジャに傭はれて隊商を指揮してシリヤに通商す。寡婦クハデイジャと結婚す

同五百九十五年。第廿六歳。これより十年間に二男四女を擧ぐ
同五百九十六年。第廿七歳。
同五百九十七年。第廿八歳。
同五百九十八年。第廿九歳。
同五百九十九年。第卅歳。
同六百年。第卅一歳。
同六百〇一年。第卅二歳。
同六百〇二年。第卅三歳。
同六百〇三年。第卅四歳。
同六百〇四年。第卅五歳。
同六百〇五年。第卅六歳。カアバの聖殿、洪水の爲めに崩潰し再建せらる。マホメット黑石を舊位置に安置す
同六百〇六年。第卅七歳。アブ、タアリブの子アリイを養子とす。奴隷ゼイドを養子となす
同六百〇七年。第卅八歳。

同六百〇八年。第卅九歳。
同六百〇九年。第四十歳。屢、メッカに近きヒラ山の洞穴に退いて冥想を凝す
同六百十年。第四十一歳。傳道第一年。天啓を受けて一定の宗教思想を得。クハディジヤ、ゼイド等新宗教を信す
同六百十一年。第四十二歳。傳道第二年
同六百十二年。第四十三歳。傳道第三年
同六百十三年。第四十四歳。傳道第四年。アブ、ベクル。オトマン等四十人に近き信者を此時期に得たり
同六百十四年。第四十五歳。傳道第五年。コレイツシ人の迫害により回教徒は第一回のアビシニヤ移住をなす
同六百十五年。第四十六歳。傳道第六年。第二回アビシニヤ移住は此歳に始まり次第に移住者を增して百一人に達す。ハムザ、オマル改宗す
同六百十六年。第四十七歳。傳道第七年。コレイツシ人同盟してハアシム家と絶交す
同六百十七年。第四十八歳。傳道第八年。絶交中マホメツトは聖月に城砦を出

て巡禮者に說法し、また諸市場を訪ふ

同六百十八年。第四十九歲。傳道第九年。絕交同盟未だ解けず

同六百十九年。第五十歲。傳道第十年。絕交同盟全く解く。十二月クハディジヤ歿す。

同六百廿年。第五十一歲。傳道第十一年。一月アブタアリブ歿す。サウダと結婚し、アイシャと許嫁す。タイフに布敎せんとしゼイドと共に負傷して歸る

同六百廿一年。第五十二歲。傳道第十二年メジイナ人十二人アカバに誓約し回敎徒となる。ムサブ、メジイナに布敎す

同六百二十二年。第五十三歲。第二アカバの盟約。回敎徒は皆メジイナに移住す、マホメットとアブ、ベクルと共に逃亡すこれ六月廿日なり、同月廿八日コバに達し、それより四日間同所に滯在して後にメジイナに入る。殿堂を建立す。アイシャと結婚式を擧ぐ

六百二十三年。第五十四歲。シエルサレムに向つて禮拜するキブラを變してカアバに向ふの制を立つ。斷食を行ふの規定を設く、メッカの隊商を襲擊せんとして目的を達せず

同六百二十四年。第五十五歲。一月ベトルの戰爭。アスマの暗殺、二月猶太のカイヌカア族殖民地を滅ぼす。九月ゼイドはメッカの隊商を掠奪す。ハブサと結婚す

同六百二十五年。第五十六歲。一月オホドの戰爭。婦人相續法の發布。ナディル族の追放

同六百二十六年。第五十七歲。一月ゼイナブと結婚す。二月オハ、サルマと結婚す。五月ガタファン族を征す。六月養女ゼイナブと結婚す。七月シリヤの境に遠征す。十二月ムスタリク族を滅す。ジユウエリアを娶る

同六百二十七年。第五十八歲。三月メジイナ市メッカ人に圍まる。コレイツァ族を滅す。六月ラアヤン族を征す。十月ディヤを使節として羅馬帝國に交通す。十一月ドウマの基督敎徒を改宗せしむ。十二月クハイバルの猶太人を暗殺す

同六百二十八年。第五十九歲。二月ホデイビヤの條約。三月海外諸國王に使節を派す。八月クハイバルの猶太人を攻む。八月アビシニヤの逃亡者歸還す。オム、ハビイバと結婚す

同六百二十九年。第六十歳。二月カアバに參拜す。メイムラを娶る。九月ミユタの戰爭。十月アムルをして再びシリヤの境に遠征せしむ

同六百三十年。第六十一歳。一月メツカを征服す。二月ハワアズィン族と戰ふ。四月テミイン族臣從す。アラビヤの各地方より使節は來りて預言者に臣從す。十月テビユクに遠征す。十二月タイフ降伏す

同六百三十一年。第六十二歳。六月クバリドをしてナジランを征せしむ。十二月アリイをしてエメンを征せしむ

同六百三十二年。第六十三歳。三月メツカに參拜して「告別巡拜」をなす。六月八日歿す

怪傑マホメツト終

明治三十八年十一月十六日印刷
明治三十八年十一月廿四日發行

（定價金五十錢）

著作者　瓦滑谷快天
發行所　山中孝之助
東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷者　中村彌助
東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　近藤商店
東京市京橋區日吉町十番地
發行發賣所　井洌堂　山中孝之助
東京市京橋區築地二丁目三十番地
關西賣捌所　積文社
大阪東區南本町四丁目

上宮教會藏版
不許複製

全國賣捌書肆

東京神田神保町　東京堂
同　神田小川町　大野書店
同　小川町　金昌堂支店
同　勉强堂
同　本郷一丁目　東亞堂
同　春木町二　森江分店
同　京橋弓町一　松邑孫吉
同　北隆館
同　銀座四　春祥堂
同　新橋堂
同　南傳馬町　目黑書店
同　飯倉五丁目　森江書店
同　芝露月町　鴻盟社
同　本石町三　金昌堂
同　通三丁目　林平次郎
同　箔屋町　前川文榮閣
同　一ッ橋通町　有斐閣
同　愛宕町　佛教館
同　青山南町　赤心社
同　小石川表町　淨土教報社
同　小石川原町　鶴聲堂
同　淺草馬道　東光館
同　小石川大塚　加持世界社
大阪心齋橋筋　松村九兵衛
大阪北久太郎町　柳原喜兵衛
京都二條木屋町　貝葉書院
同　寺町通　若林茂一郎
同　松田庄助
同　勝山町
同　文進堂
同　南波庄兵衛
同　集堂
同　文堂
同　倉田屋
同　越後水原
同　地藏堂
同　長岡
同　同
同　三條
同　柏崎
同　高田
同　同
同　同
同　直江津
同　上毛前橋
同　高崎
同　窯岡
同　下總千葉
常陸水戸
同　七浦
福浦文藏
安中平三郎
集英堂
松崎和市
五百川書店
藤戸朝六
萬松堂支店
北光社
同　五條
萬松堂本店
同　同
江口藤吉
日黑十郎
伊勢四日市
同　同
岩田書店
伊東書店
川瀨代助
名古屋本町
島野松次郎
永東書店
三輪伊六
三輪文次郎
一貫堂
其中堂
淺見鉦太郎
高須廣治
富田書店
谷島屋書店
吉見義次
高木市兵衛
內田書店
水原文進堂
水原本店
宮津書店
歌傍館
武村寅吉
中川書店
萬善堂
豐住書店
岩田書店
伊東書店
川瀨代助
島野松次郎
永東書店
三輪伊六
三輪文次郎
一貫堂
其中堂
淺見鉦太郎
高須廣治
富田書店
谷島屋書店
吉見義次
淡路洲本
長崎酒屋町
同　引地町
同　勝山町
同　佐世保市
肥前大村
新潟古町通
同
越後水原
同　地藏堂
同　長岡
同　同
同　三條
同　柏崎
同　高田
同　同
同　同
同　直江津
上毛前橋
同　高崎
同　窯岡
常陸水戸
同　七浦
常陸石岡
下野宇都宮
奈良橋本町
大和帶解
同　郡山
同　八木
同　高田
同　五條
同　同
伊勢津市
同　同
伊勢四日市
同　同
名古屋本町
同　宮町
同　玉屋町
同　同
同　鍛冶町
同　同
同　門前町
同　同
三河豐橋
同　同
遠州濱松
駿河靜岡

全國賣捌書肆

甲府柳町　柳正堂
同　古堂　金澤市片町
大津後在家町　古川書店　富山市
同　中京町　文泉堂支店　高岡市
近江彥根　廣田七次郎　伯耆米子
同　長濱　文泉堂　出雲松江
同　同　中村藤平
岐阜泉町　郁文堂　同　鹽浴村
同　山下町　三浦書店　石見濱田
美濃大垣　岡安庭助　備前岡山市
長野大門町　四澤書店　同　同
信州上諏訪　日新堂　同　同
同　松本町　高見書店　同　同
同　同　水野堂　同　同
仙臺市大町　藤崎書店　同　井原
同　新傳馬町　有千閣　備中笠岡
同　松榮堂支店　同　高梁
盛岡市升町　佐藤庄兵衛　備後府中
弘前市本町　今泉本店　同　尾ノ道
山形市七日町　五十嵐書店　周防岩國
米澤市立町　盛文堂　同　柳井津
鶴岡十日町　日向書店　長門山口
秋田市茶町　成見清兵衛　同　同
福井市　品川書店　同　船本
福井市　中村書店　長門長府
同　宇都宮源平　同　萩町
中田清兵衛　同　下關
學海堂　同　同
今井敏文　紀伊和歌山市
川岡清助　阿波德島市
有田傳助　同
板倉理四郎　阿波脇町
安達共榮堂　讃岐高松市
武內彌三郎　同　同
奧田金正堂　丸龜市
細謹舍　伊豫松山市
博文堂　同　同
吉田朔七　同　同
五竹園書店　同　大洲
北辰舍　同　同
龜山新助　同　宇和島
大成堂　土佐高知市
芸香堂　筑前福岡市博多
白銀本店　同　同
明文堂　同　同
白銀支店　筑後久留米市
小原松千代　同　同
中原卯兵衛　豐前豐津
池田茂助　豐前中津
同　四日市　中國角兵衛
同　祇園　甲斐治平
上山松藏　豐後大分
瓜野集文堂　高野菊三郎
同　竹田町　河內壯助
宮井宗兵衛　肥前佐賀市
黑崎精二　平井平治
井關文榮堂　大坪萬六
同　同　牧川雄次郎
弘文堂　肥前唐津
宮脇開盛堂　長崎次郎
龜友堂　熊本市
開文舍　日向宮崎
同　延園　松井義雄
向井庫次郎　谷伊吉
鹿兒島市中町　吉田幸兵衛
土肥與平　谷村藤吉
同　同　久永金光堂
末吹久次郎　篠原書店
同　同　足立常吉
双松堂　同　東千石町
同　同　同　館末廣町
石崎忠八　同　一二堂
澤本駒吉　札幌區南一條
佐藤書店　宮賞堂
筑前福岡市博多　白鳥書店
博文社　小樽堺町
同　入舟町　川南書店
高田書店　後志御鉾內町
菊竹書店　石狩旭川町
田中幸次郎　村上書店
同　同　三澤書店
佐野長七　同　岩見澤
明治堂

文學博士　村上專精先生序　大內青巒先生跋
加藤咄堂先生著

死生觀

全一冊
定價金壹圓五錢
郵稅金六錢

死とは何ぞや、生とは何ぞや、これ吾人の熱心に研究すべき問題にあらずや、本書は、著者が多年研究を傾け盡して、古來の哲人、傑士、英雄、烈婦が事蹟に徴し、更に東西の學說を考へ、終りに此千古の疑問に、一大解決を與へたるものにして、諸種の人生問題を根底より論評し、加ふるに趣味ある逸話、金言を以てす、請ふ一本を購ふて、勇猛の精神を發揮せられんことを。

文學博士　前田慧雲先生序　文學博士　南條文雄先生跋
加藤咄堂先生著

運命觀

全一冊
定價金壹圓五錢
郵稅金六錢

人は運命の兒なり、榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる、抑運命とは何ぞや、本書は著者が嶄新なる論を以て、舊運命觀を盤破し、世界各民族の運命に關する風習を擧げ、更に深遠なる哲學、科學の眞理により、新運命觀を建設して、個人、國家、社會の運命を論じ、終りに人生の眞趣を解して、これが開拓策を說き、此運命と奮鬪して、成功の地位に達せるの實例を示す、讀め、浮世の波に漂へるの士、來れ、開運の鍵を得んとするの徒、本書は成功の秘訣なり、開運の守符なり。

文學博士　井上圓了先生序　島地默雷先生跋
加藤咄堂先生著

女性觀

全一冊
定價金壹圓五錢
郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべきか、惡魔の化身として厭忌すべきか、本書は、流麗の文と、獨得の觀察とを以て、女性觀の變遷、歷史上の活動を敍し、賣買、掠奪等の奇習異俗より、名媛才女が佳話、並に闇黑面の女性に及び、婚姻、獨居、職業等の問題を究めて、社會上の地位を明にし、更に戀愛、嫉妬等の心理的現象を示し、筆を女性の敎育、德婦の養成に擱く、神か、魔か、請ふ一讀を吝む勿れ。

前東京師範學校敎諭　小山左文二先生著

日本文法の解說及び練習

全一冊
三百八十ページ餘
定價金六十錢
郵稅金十錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受驗者、並に文部省敎員檢定受驗者參考書として中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校敎員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の作に係る。解說周到にして明快、載するところの練習問題實に一千五百餘。添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於けて各種高等學校入學試驗文法問題及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省敎員檢定試驗文法問題の全部を以てし、一一適切に之を解說指導せり。

心的生活 英雄史

全一冊 美裝 菊判三百五十ページ 定價金五拾錢 郵税金八錢

渡邊國武君序
加藤咄堂君著

武士道の精髄は其心的修養にあり。本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷とを觀察し、波瀾あり抑揚ある彼等が行動の裏面には煩悶あり慰安ある心的生活の存するを說破したるものにして、其名は英雄史たりといへども、實は是れ武士道發達史たり、思想變遷史たり。英雄傳たり。隱逸傳たり。若し其れ懦夫をして奮起せしむる彼等の事蹟と秋霜烈日の如き彼等が教訓とに至りては眞に坐右欠くべからざる修養の規箴たるを失はず、趣味に富むことは小說に優り教訓を含むとは倫理書に過ぎたり。

犯罪論及女性犯人

醉庵 鈴木券太郎先生著

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十ページ●定價金一圓五十錢郵税金拾五錢

犯罪とは何物か犯人とは何物か女性とは何物か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り罪罰の根本哲學を開立し世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳說し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依證し先天犯者情熱犯者其他の分類下に於ては各其特質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を究め造化の微を闡き人情の細に入り女性の秘器を暴露し其罪惡を檢案する處觀察犀利思想超凡洵に是れ科學の精華文學の上乘たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理想深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也

上宮太子實錄

久米邦武先生著

全一冊 洋裝美本 定價金七十五錢 郵税金八錢

本書は高眼達識を以て史界獨步の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇拔なる見解とを以て、日本文明の開拓者なる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる從來の傳說を擊破し前人未發の新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心とし政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね、其特色を說きて剩す所なく、論は東西に及び、識は古今を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書たり。興國の氣運今や熟して人は皆な我が文明の眞知を知らむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

來世之有無

新佛教徒同志會編纂

全一冊 定價金二十錢 郵税金四錢

現代の名士一百餘が來世の有無につきて回答せられたるものにして實に之れ空前の珍品たり

「加藤弘之、佐治實然、志賀重昂、井上哲二郎、木下尙江、幸田露伴、前田慧雲、渡邊國武、建部遯吾、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富、三島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、戶水寬人、海老名彈正、平井金三、中島力造の諸君外九十餘大家」

曹洞宗管長 森田悟由禪師序
加藤咄堂君 峯玄光君 共著

禪觀錄

全一冊 定價參拾錢 郵税金四錢

禪とは何ぞや、曰く言ひ難し、本書は言ひ難きの禪を、說き盡して餘蘊なく、更に發して、武士道の根底となり、凝つて、文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し、逸話あり、漫筆あり、神韻縹緲、一讀卷を捲く能はざらしむ。

井洌堂發行書籍

加藤嘘堂先生著

通俗講話 **佛教要義**

全一冊●總クロース美本
●紙數凡四百五十ページ
正價金一圓廿五錢
郵稅金拾五錢

本書は著者が多年の研究を傾け盡くして、浩瀚なる佛教の要を摘み萃を拔きて秩序整然たる易く解し易き**談話體**に說述し先づ佛教以前の印度哲學より**釋迦牟尼の傳記**に入り、大小乘の區別並に其發達變遷を說き、教理を示しては**佛教の宇宙觀**に筆を起し、宇宙は如何にして成立せしや、又宇宙は如何なるものなるや、其現象は如何、其本體は如何と窮盡し、人生問題に於ては**生死の根原**生前死後の狀態、靈魂の有無、輪廻轉生等を明し、其の道德を說ひは、性の善惡並に**善惡の標準**を論じ十善十惡、苦樂因果の原理を示し更に**煩惱の源底**を盡くして、世出世の道德、戒律を精敍して地獄極樂の說に及び**身心の關係**より**識心の狀態**に入り、微密に其分類を說きて唯心所現の順序を示し、深く三界唯一心の妙理に入り微を究め玄を闡き**靈妙なる宇宙と靈妙なる心識**との感應を述べ筆舌の及ばざる佛教の幽遠高妙なる境を覗はしめ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開く佛教の要義は**綱羅して洩すことなく**更らに佛教發達の歷史を說くに至りては**各宗派の特色**を示し教理を擧げ、終りに其一貫の理を論じ加ふるに印度論理學として知られたる**因明の一斑**を以てす、請ふ一本を購ふて佛教の妙趣を味はれむことを。

99
206

013552-000-5

99-206

快傑マホメット

忽滑谷　快天／著

M38

ABA-0014